Working Paper Series No.31

ハルビンにおけるウクライナ人の日本研究
――『遠東雑誌』と『ウクライナ・日本語辞典』――

神戸学院大学経済学部
岡部芳彦

2021 年 9 月

THE ECONOMIC SOCIETY OF KOBE GAKUIN UNIVERSITY

ハルビンにおけるウクライナ人の日本研究
――『遠東雑誌』と『ウクライナ・日本語辞典』――

１　はじめに

日本の傀儡国家であった満洲国のハルビンでは、ウクライナ民族の家（ウクライナ・クラブ）に所在したウクライナ人居留民会を中心に、さまざまなウクライナ語の出版物が発行されていた。

1934 年 10 月にウクライナ民族の家では、『満洲通信』の編集スタッフにより、極東で最初のウクライナ関連出版物の展示会を開催することが計画された。予定された展示物は、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで出版されたウクライナ語の定期刊行物、随想、学術出版物、ハルビンにおけるウクライナ語の新聞などであった。展示会は 1936 年 8 月 25 日、ウクライナ青年連盟のパーティに合わせて開催された。翌 1937 年 7 月 18 日の満洲帝国ウクライナ人居留民会の総会中にもウクライナ民族の家のロビーで再度開かれた[1]。

ウクライナ人居留民会はさまざまなウクライナ語の出版物を刊行していたが、残念ながらその多くは現在残っていない。一方、それらの出版物には日本や日本文化に関連するものも含まれていた。1936 年にはウクライナ人居留民会によって『遠東雑誌』が出版された。これには、中国文学などに加えて日本の詩編や短編小説もウクライナ語に翻訳されて収録されていた。同書やその編集に関わったハルビン・ウクライナ東洋学者協会については、ロマン・ラフの優れた研究がある[2]。本稿では、まず、それら先行研究と『遠東雑誌』の原本を参照して、同書の概要とそこに含まれた日本語作品を中心に見てみたい。

次に、1944 年に刊行された『ウクライナ・日本語辞典』の原本を用いて、それらの内容や発刊の背景を分析する。本稿では、『ウクライナ・日本語辞典』の言語学的な分析は行わない。それについては日野貴夫・イヴァン・ボンダレンコの先駆的な研究やユリア・マラホヴァの先行研究がある[3]。日野によれば、その研究で使用されたのはニューヨーク公共図書館に所蔵されていたイヴァン・スヴィットの原本のマイクロフィルムを、中井和夫がコピーしたものである。この『ウクライナ・日本語辞典』の編纂の経緯と編集過程については、スヴィットとクペツィキーの回顧録にそれぞれ記述されている。本稿では、それらを基に、同辞書を使用して、この辞書が作成された経緯と、どのように作られたのかに焦点を絞って分析したい。

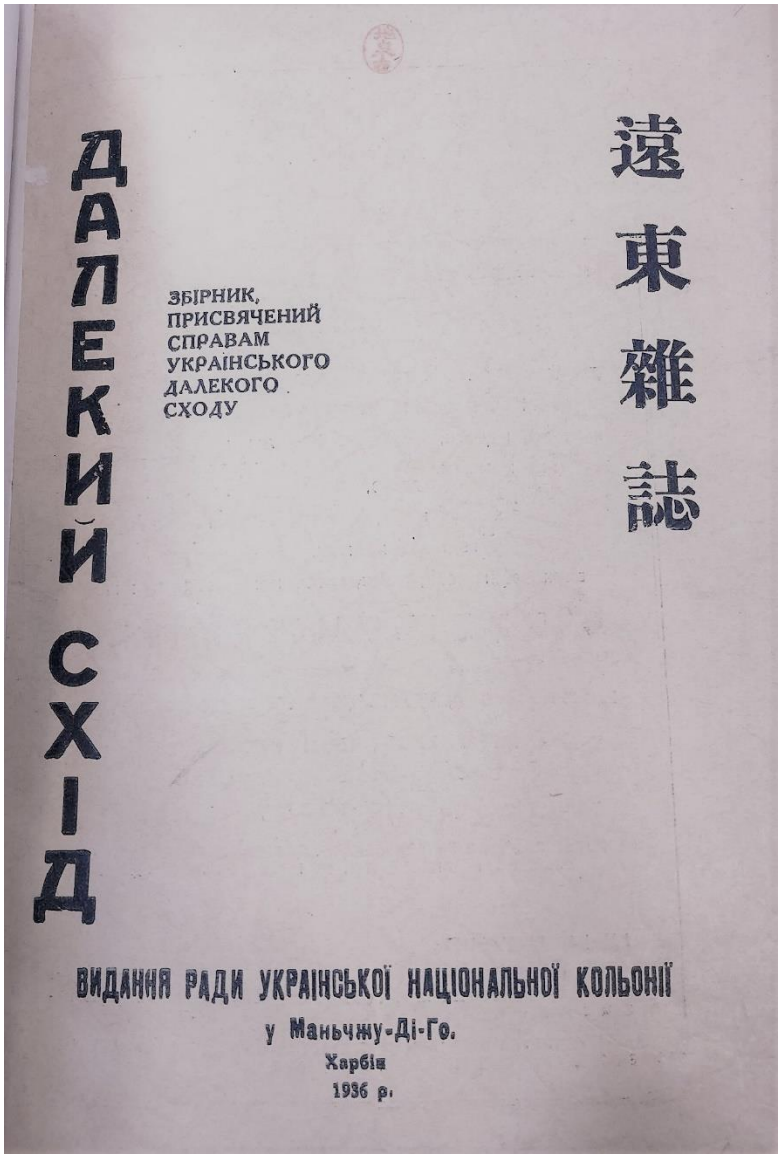
２　『遠東雑誌』

『遠東雑誌』は、ドミトロ・バルチェンコを編集者として満洲帝国ウクライナ人居留民会によって、ウクライナ語で 1936 年 10 月中頃に出版され、発行部数は 350 部、目次や広告を除いて 83 頁であった（**図 1**）[4]。

その出版目的は、序文によれば「極東全般、特に極東ウクライナ人に関する情報を世界中のウクライナ人に広める」ことが彼らの責務であると考え、また紹介作品の選出に際して、

政党や学派の影響を受けていないことも強調されている[5]。

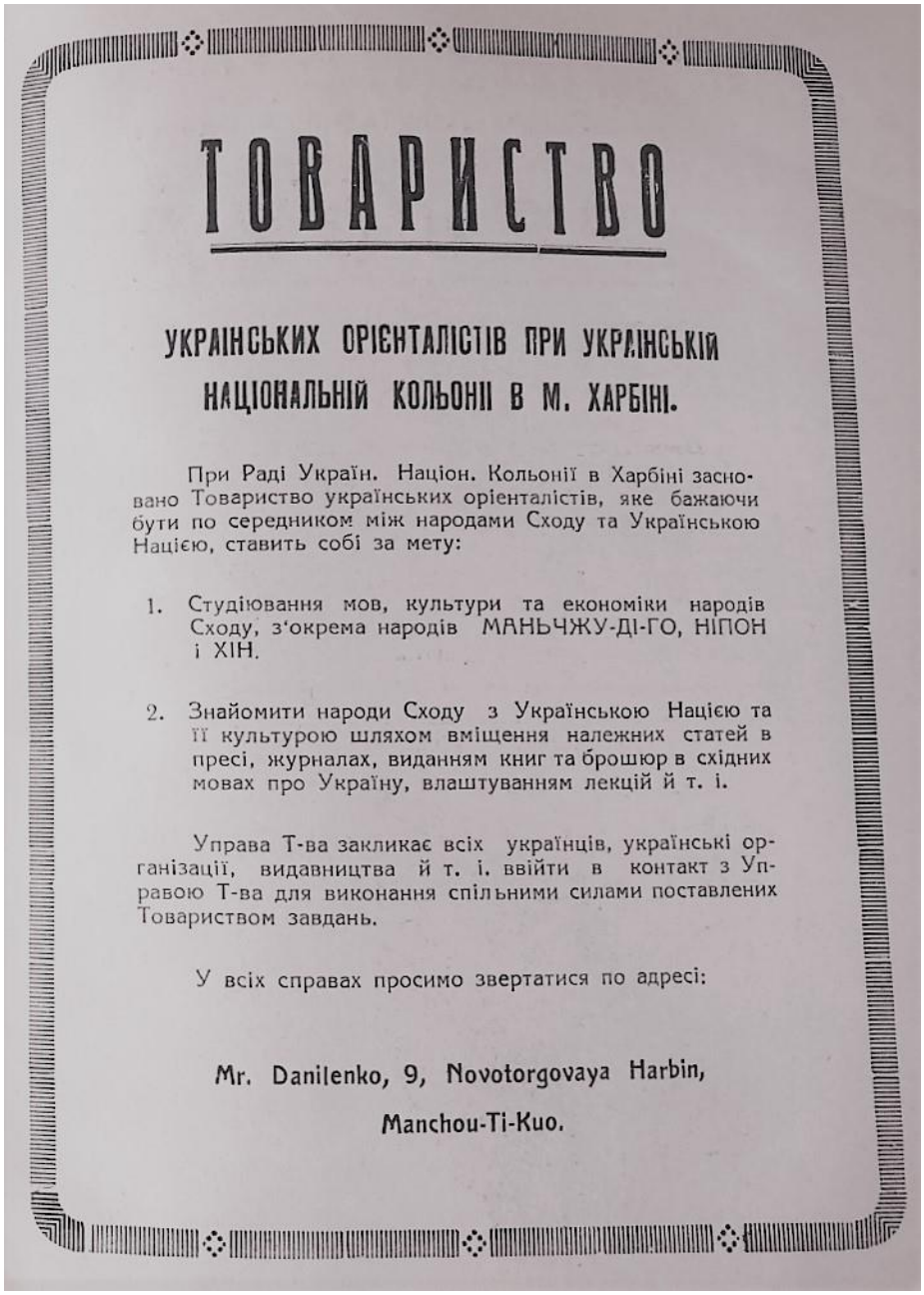
図１　『遠東雑誌』«Далекий Схід»



【出典】ヤコブキン氏提供。ロシア国立図書館所蔵。

この書籍刊行に対して中心的な役割を担ったのは、ウクライナ人居留民会内のウクライナ東洋学者協会であった（**図 2**）。この協会は 1936 年初頭に設立され、1938 年初頭以降の活動の記録がないため、その活動を終えたと考えられている。主な協会メンバーは、会長フョードル・ダニレンコ（**図 3**）、副会長ワシーリ・オヂネツ、書記ボリス・ヴォブリー、ドミトロ・バルチェンコ、ヴァレンティーナ・コルダ=コロテンコらであった[6]。

図 2　ハルビン・ウクライナ人居留民会内「ウクライナ東洋学者協会」



ТОВАРИСТВО

УКРАІНСЬКИХ ОРІЄНТАЛІСТІВ ПРИ УКРАІНСЬКІЙ НАЦІОНАЛЬНІЙ КОЛЬОНІЇ В М. ХАРБІНІ.

При Раді Україн. Націон. Кольонії в Харбіні засновано Товариство українських оріенталістів, яке бажаючи бути по середником між народами Сходу та Українською Нацією, ставить собі за мету:

1. Студіювання мов, культури та економіки народів Сходу, з'окрема народів МАНЬЧЖУ-ДІ-ГО, НІПОН і ХІН.

2. Знайомити народи Сходу з Українською Нацією та її культурою шляхом вміщення належних статей в пресі, журналах, виданням книг та брошюр в східних мовах про Україну, влаштуванням лекцій й т. і.

Управа Т-ва закликає всіх українців, українські організації, видавництва й т. і. ввійти в контакт з Управою Т-ва для виконання спільними силами поставлених Товариством завдань.

У всіх справах просимо звертатися по адресі:

Mr. Danilenko, 9, Novotorgovaya Harbin,

Manchou-Ti-Kuo.

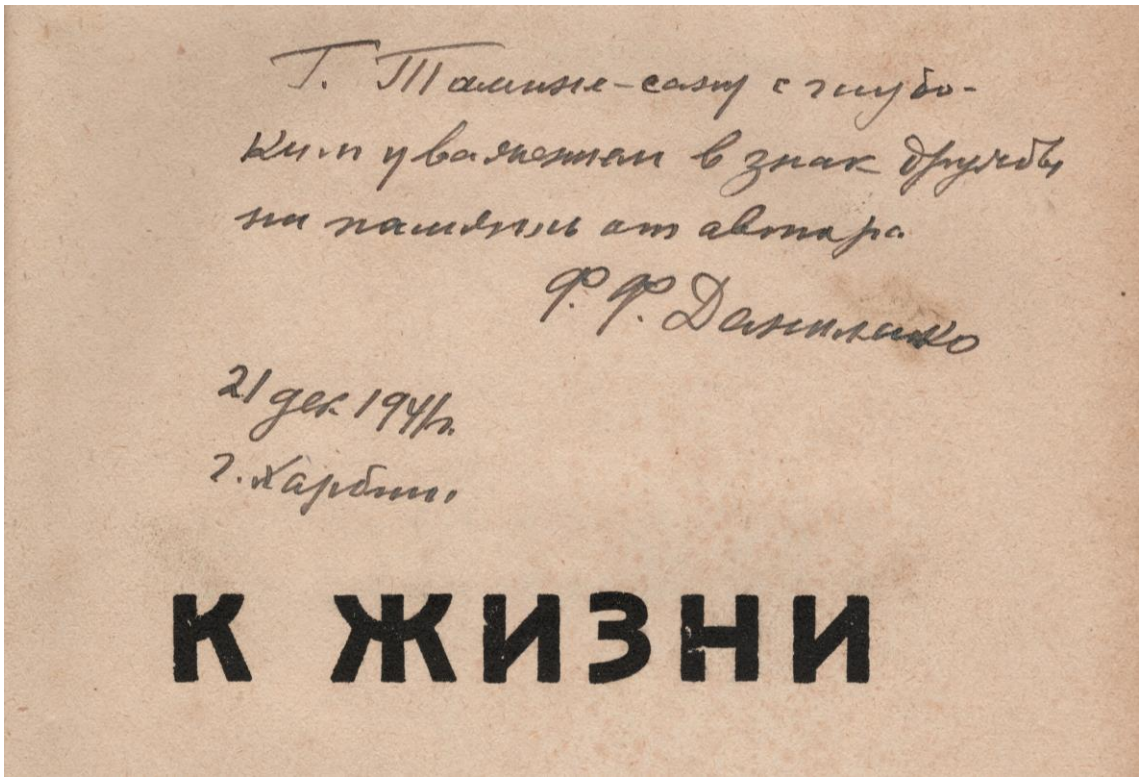
【出典】チョルノマズ氏提供、『遠東雑誌』3 枚目（ページ数なし）。

図 3　フョードル・ダニレンコ

【出典】岡部蔵（原本）。

協会メンバーの略歴をまとめておきたい。会長のフョードル・ダニレンコは著名な東洋学者であり、1933 年にはハルビンのフロマーダの代表に選ばれ、ウクライナ人居留民会の幹部としてウクライナ人社会のリーダーの一人であった。後年は小説家として活動し『私たちが自分を犠牲にするとき』や『人生に』といったロシア語作品を残した（**図 4**）。ソ連の満洲占領後に有罪判決を受け、1955 年にカザフスタンのカラガンダで没した[7]。

図 4　フョードル・ダニレンコ著『人生に』（1931 年）



【出典】岡部蔵（原本）。署名はダニレンコの自署。「タミネさん、
著者 F .F. ダニレンコから友情の証として深い敬意を持って。
1941 年 12 月 21 日、ハルビン」

書記のボリス・ヴォブリーは、日本でもピョートル・ポダルコの研究でその経歴が紹介されている。ヴォブリーは、ポルタヴァ出身でウラジオストクの東洋学院で学んだ。サハリンで翻訳者として働いたのちに来日、1924 年から 1934 年にかけて福井県立敦賀商業学校でロシア語を教えた[8]。その後、上海に移り、1938 年には上海のウクライナ・フロマーダの副代表となった。1939 年からは、ハルビンでウクライナについて日本語の書籍を出版した。第二次世界大戦後は米国に移住し 1970 年前後にワシントンで没した[9]。

ワシーリ・オヂネツは中国語や中国学を専門とする東洋学者である。ハルビンのウクライナ青年連盟 SUM（СУМ）のメンバーで、学術的にはフョードル・ダニレンコに師事した。1919 年 3 月にイルクーツクから家族と一緒にハルビンに移った。 1928 年から 1933 年、東洋学・商学大学（のちの聖ウラジーミル大学東洋学・経済学部）で学び 1938 年まで同大学の准教授を務め「漢字の書き方の分析」クラスを担当した。中国語、満洲語、日本語に通じていた。ウクライナ青年連盟をはじめウクライナ人居留民会の活動にも積極的に参加し、新京の建国大学でもロシア語や中国文学と東ヨーロッパの歴史を教えた。またニコライ（ミコラ）・バイコフの『偉大なる王』の日本語への翻訳に参加した。ソ連の満洲占領後は逮捕さ

れ送還された。1945 年から 1956 年にタイシェットのオゼルラグ労働収容所に収監され、釈放後はカラガンダで経済学者として働き、ブコヴィナ出身のウクライナ人女性と結婚し、1972 年同地で没した[10]。

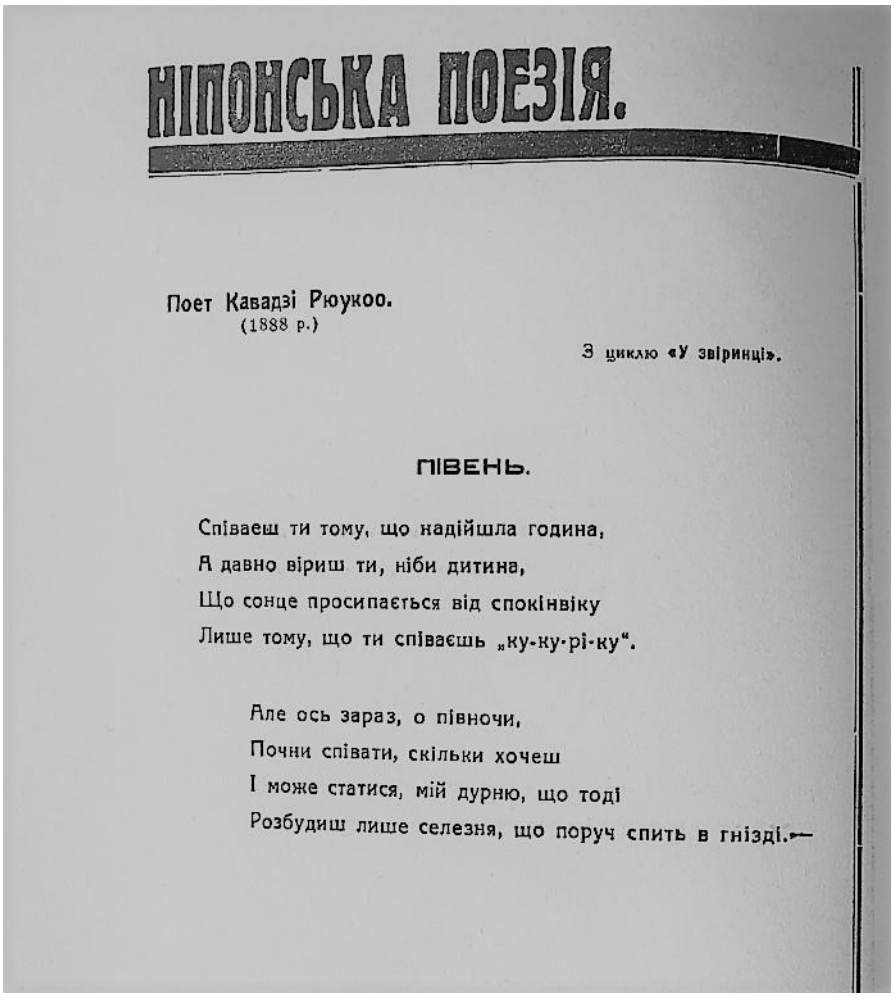
ドミトロ・バルチェンコは、もともとはウクライナ国民共和国軍の軍医で、1931 年にヴォルィーニから上海を経由してハルビンに来た。1933 年からは大澤隼が社長を務めていた『ハルビンスコエ・ウレーミヤ』紙でウクライナについてのロシア語の紙面を担当した[11]。満洲帝国外交部が作成した日本語資料「満洲のウクライナ人」にも名前があり、それによれば 1937 年前後にはウクライナ人居留民会の副議長になっていた[12]。

ヴァレンティーナ・コルダ＝コロテンコはハルビンにおけるウクライナ民族主義者組織の活動家であったロマン・コルダ＝フェドリフ（本名ミハイロ・ザティナイコ)[13]の妻で、1912 年 2 月 2 日にハイラル市生まれ、市内の学校を卒業後、1935 年にハルビンの聖ウラジーミル大学を卒業した。専門は中国学であり、またウクライナ極東シーチの活動家で、1938 年から 1939 年の間にウクライナ人居留民会の女性グループの責任者でもあった[14]。

本の内容を見てみたい。オヂネツをはじめ中国専門家が協会メンバーに多かったため中国語や満洲の作品が多く選ばれているが、同程度の日本の作品も含まれている。まず、「日本の詩」として紀友則の「ひさかたの」といった古典に始まり、川路柳虹、与謝野晶子などの作品がウクライナ語に翻訳され掲載されている（**図 5**）[15]。また、久米正雄の短編小説「或る求婚者の話」（1922 年）も含まれている[16]。また、作者不詳の「日本の生活に関するエッセー」、「結婚式のすべての習慣」、「日本の住居」、「日本の国民教育」といった日本の生活や文化についてのエッセーも含まれている。

ウクライナ人からは、オヂネツによる中国の名称に関する記事「支那か中国か」、「現代東洋学」、イヴァン・シュレンディク博士[17]の極東や満洲のウクライナ人口についての考察「満洲帝国のウクライナ人」、バルチェンコの「時局の要請」と題した時事評論、アジアにおけるウクライナ人の解放運動を主題としたミコラ・コヴリャンシキー[18]の短編小説「1917 –1920」に加えて、ウクライナ人居留民会の現状についてなどさまざまなジャンルの記事が掲載されている。

図 5「日本の詩」



НІПОНСЬКА ПОЕЗІЯ.

Поет Кавадзі Рюукоо.
(1888 р.)

З циклю «У звіринці».

ПІВЕНЬ.

Співаєш ти тому, що надійшла година,
А давно віриш ти, ніби дитина,
Що сонце просипається від спокінвіку
Лише тому, що ти співаєшь „ку-ку-рі-ку".

Але ось зараз, о півночи,
Почни співати, скільки хочеш
І може статися, мій дурню, що тоді
Розбудиш лише селезня, що поруч спить в гнізді.—

【出典】チョルノマズ氏提供、『遠東雑誌』4 頁。川路柳虹の詩。

図 6　チューリン商会のウクライナ語広告

НАЙБІЛЬШІ Й НАЙСТАРШІ В МАНЬЧЖУ-ДІ-ГО

Універсальні Склепи

Т./Д І. Я. ЧУРИН і Ко.

У ХАРБІНІ: НОВЕ МІСТО, ПРИСТАНЬ, МОДЯГОУ.
ЦЕНТРАЛЯ У ХАРБІНІ.

Відділи: у Сіньцзіні, Мукдені, Дайрені, Сипингаї, Хайларі, Куаньченцзи, Гіріні та Ціцікарі.

Представництва: у всіх значніших пунктах Маньчжу-Ді-Го.

Власні фабричні підприємства.

Фабрики: тютюнова, ковбас, фарб.

Гуральня. Сортовня чаю. Витримані вина.

Представництво найбільших закордонних фірм.
Приймаються замовлення на виписку товарів.

Відділи: гуртовий та експортний.

Автомобільний та Технічний, Авто, Сільськогосподарчий.

Майстерні: Авто, механічно-технічна, та радіотехнічна.

【出典】チョルノマズ氏提供、『遠東雑誌』85 枚名（ページ数なし）。

図７　ワシーリ・オヂネツの広告（左上）

【出典】『遠東雑誌』4 枚目（ページ数なし）、なお、画像下の広告はベールィ社交ダンス教室のウクライナ語版広告である（『満洲通信』にはロシア語版広告のみ掲載。岡部『日本・ウクライナ交流史 1915 –1937 年』132 頁）。

一方、『遠東雑誌』と題され定期刊行物を思わせる体裁であり、「最初の号がウクライナ市民によってどのように受け入れられるかに応じて」継続して出版される予定であったが、この号のみの刊行で終わった。

同書の最後には商業広告も掲載されている。チューリン商会のウクライナ語版広告（**図 6**）

のほか、ワシーリ・オヂネツの「通訳者」としての広告が掲載されている（**図 7**）。ウクライナ語、ロシア語、英語と満洲語の通訳とアジア言語の指導も可能とある。そのオヂネツが共著者であった『ウクライナ・日本語辞典』について次節で見てみたい。

３　『ウクライナ・日本語辞典』

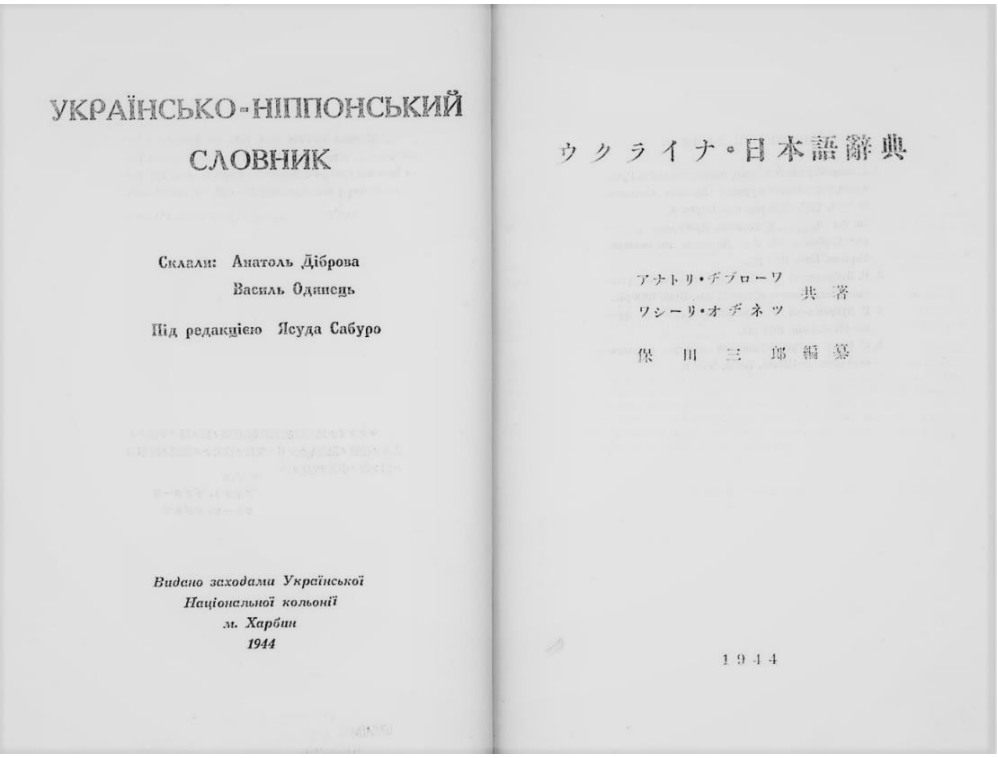
まずは、同辞書の概略をまとめたい。アナトリ・ヂブローワ、ワシーリ・オヂネツ共著、保田三郎編纂『ウクライナ・日本語辞典』（A. Дібров та Василь Однець　Під редакцією Ясуда Сабуро УКРАЇНСЬКО-НІППОНСЬКИЙ СЛОВНИК Видано хаходами Української Національнальної кольонії м.Харбин, 1944）は、収録語数約 11000 語、266 頁、辞書部分は左右二段組で 47 行、発行部数 1000 部で、確認される限りで世界最初のウクライナ語・日本語辞典である（**図 8**）。日本語を示す言葉としては、ヤポンシキー（японський）ではなく、「ニポンシキー（ніппонський）」が使用されている。ハルビンのウクライナ語新聞『満洲通信』では、1932 年の発刊当初は、日本について Японія や японський が使われていたが、1935 年前後から Ніппон や ніппонський といった語に置き換わっている[19]。これはハルビンのロシア語刊行物でも同様で、ハルビン特務機関や日本当局の関与・指導があった可能性が先行研究でも指摘されている[20]。

日野・ボンダレンコの研究でも、同辞書の構成について、奥付も含めて考察されている。同辞書は、クリャブコ＝コレツキーの序文（**図 9**）、著者のヂブローワ、オヂネツによる序文（**図 10**）、ヂブローワによる「ウクライナ小論」と題されたウクライナの歴史・文化に関する論説、辞書部で構成されている。まず目につくのは、表題である。扉では「ウクライナ・日本語辞典」、奥付では「ウクライナ日本語辞典」と中黒が抜けており、統一されていない。

クリャブコ=コレツキーの序文はウクライナ語のみで、ヂブローワとオヂネツの序文はウクライナ語・日本語併記、ヂブローワの「ウクライナ小論」は日本語のみとまったく異なる形式で書かれている。よって、クリャブコ＝コレツキーの序文は、そもそも日本人に読ませることを想定していなかったと思われる。一方、ヂブローワとオヂネツの序文は日宇両言語併記で、日本人に読ませることを想定していたと思われる。また「ウクライナ小論」は日本語のみで日本人読者を対象にしていたと考えてよい。

著者については、表紙では「アナトリ・ヂブローワ」と「ワシーリ・オヂネツ」となっているが、奥付ではヂブローワではなく「アナトーリ・クヴイトチエンコ」となっている（**図 11**）。第３章でも書いたとおり、クペツィキーによると、ヂブローワは偽名で、本名はティシチェンコである。この頃は、配偶者の名前であるクヴィチェンコを名乗るようになっていた。クヴィチェンコは新京市（現在の長春市）、オヂネツは海拉爾市（現在の中華人民共和国内モンゴル自治区海拉爾区）に居住していた。オヂネツの名前は『建国大学要覧』でも確認でき、1941 年頃満洲国の「外務局嘱託」であり、新京の建国大学で兼務講師としてロシア語を教えていた[21]。

図 8　『ウクライナ・日本語辞典』扉



УКРАЇНСЬКО-НІППОНСЬКИЙ
СЛОВНИК

Склали: Анатоль Діброва
Василь Одинець

Під редакцією Ясуда Сабуро

Видано заходами Української
Національної кольонії
м. Харбин
1944

ウクライナ・日本語辭典

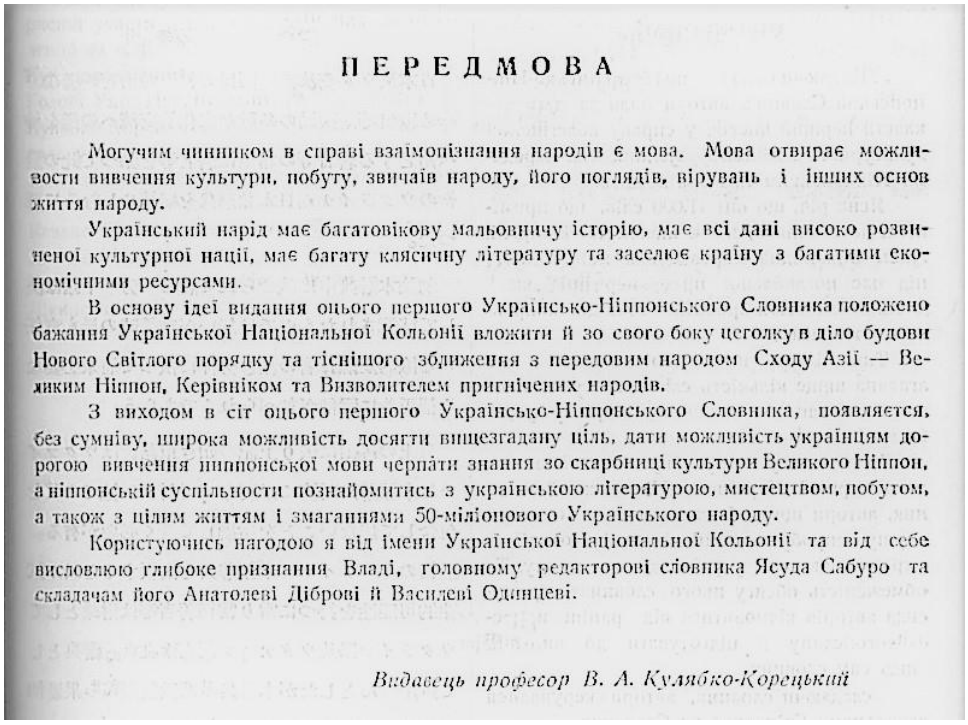
アナトリ・デブローワ
ワシーリ・オヂネツ　共著

保田三郎編纂

1944

【出典】岡部蔵。

図 9　ヴィクトル・クリャブコ＝コレツキー著「序文」



ПЕРЕДМОВА

Могучим чинником в справі взаїмопізнання народів є мова. Мова отвирає можливости вивчення культури, побуту, звичаїв народу, його поглядів, вірувань і інших основ життя народу.

Український нарід має багатовікову мальовничу історію, має всі дані високо розвиненої культурної нації, має багату клясичну літературу та заселює країну з багатими економічними ресурсами.

В основу ідеї видання оцього першого Українсько-Ніппонського Словника положено бажання Української Національної Кольонії вложити й зо свого боку цеголку в діло будови Нового Світлого порядку та тіснішого збдиження з передовим народом Сходу Азії — Великим Ніппон, Керівніком та Визволителем пригнічених народів.

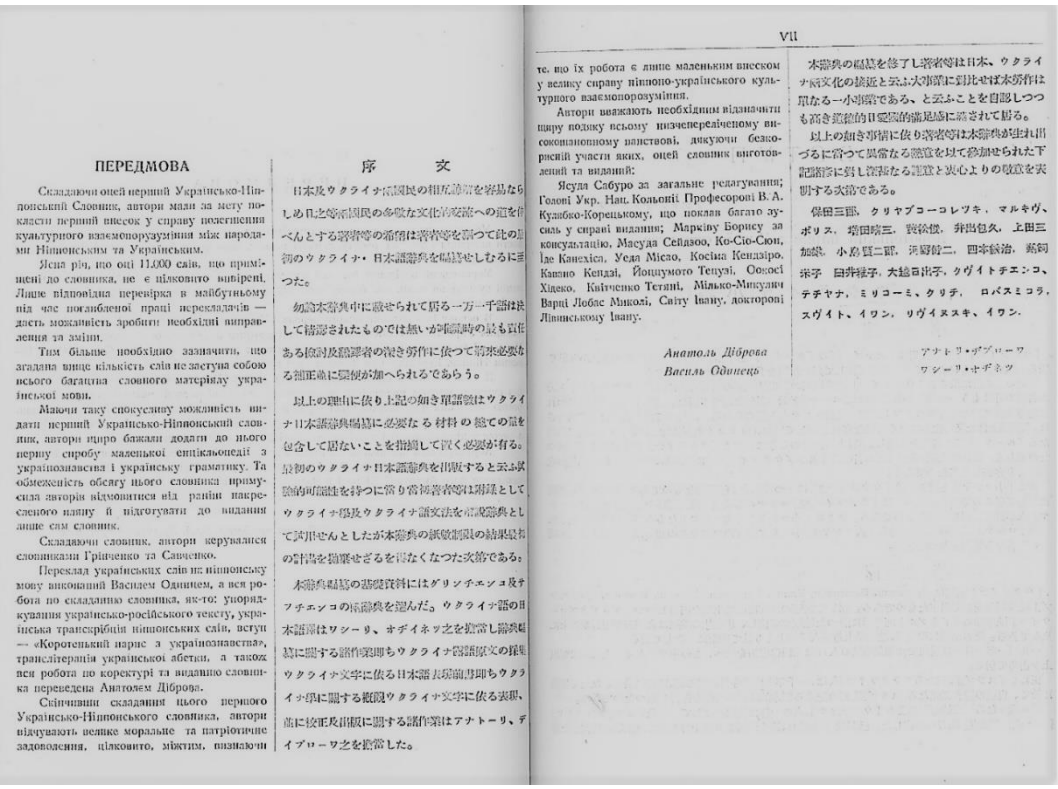
З виходом в сіг оцього першого Українсько-Ніппонського Словника, появляється, без сумніву, широка можливість досягти вищезгадану ціль, дати можливість українцям дорогою вивчення ниппонської мови черпати знання зо скарбниці культури Великого Ніппон, а ніппонській суспільности познайомитись з українською літературою, мистецтвом, побутом, а також з цілим життям і змаганнями 50-міліонового Українського народу.

Користуючись нагодою я від імени Української Національної Кольонії та від себе висловлюю глибоке признання Владі, головному редакторові словника Ясуда Сабуро та складачам його Анатолеві Діброві й Василеві Одинцеві.

Видавець професор В. А. Кулябко-Корецький

【出典】岡部蔵。

図 10　アナトリ・ヂブローワ、ワシーリ・オヂネツ著「序文」



ПЕРЕДМОВА

Складаючи оцей перший Українсько-Ніпонський Словник, автори мали за мету покласти перший внесок у справу полегшення культурного взаємоорузуміння між народами Ніпонським та Українським.

Ясна річ, що оці 11,000 слів, що приміщені до словника, не є цілковито вивірені. Лише відповідна перевірка в майбутньому під час поглибленої праці перекладачів — дасть можливість зробити необхідні виправлення та зміни.

Тим більше необхідно зазначити, що згадана вище кількість слів не злагуна собою нього багацтва словного матеріялу української мови.

Маючи таку спокусливу можливість видати перший Українсько-Ніпонський словник, автори щиро бажали додати до нього першу спробу маленької енцікльопедії з українознавства і українську граматику. Та обмеженість обсягу нього словника примусила авторів відмовитися від раніш накресленого плану й підготувати до видання лише сям словник.

Складаючи словник, автори керувалися словниками Грінченко та Саченко.

Переклад українських слів на ніпонську мову виконаний Василем Одинцем, а вся робота по складанню словника, як-то: упорядкування українсько-російського тексту, українська транскрібція ніпонських слів, вступ — «Коротенький нарис з українознавства», транслітерація української абетки, а також вся робота по коректурі та виданню словника переведена Анатолем Діброва.

Скінчивши складання цього першого Українсько-Ніпонського словника, автори відчувають велике моральне та патріотичне задоволення, цікавито, міжтим, пізнаючи

序　　文

日本及ウクライナ両国民の相互諸語を容易ならしめ日之邦両国民の多彩な文化的交流への道を付べんとする著者等の希望は著者等を導つて此の最初のウクライナ・日本語辞典を編纂せしむるに至つた。

勿論本辞典中に載せられて居る一万一千語は決して精選されたものでは無いが時間時の最も責任ある校閲及翻譯者の深き労作に依つて將來必要なる補正並に改良が加へられるであらう。

以上の理由に依り上記の如き單語數はウクライナ日本語辞典編纂に必要なる材料の総ての語を包含して居ないことを指摘して置く必要が有る。最初のウクライナ日本語辞典を出版すると云ふ試験的可能性を持つに當り著者等は附録として ウクライナ語及ウクライナ語文法を辞典として 試出せんとしたが本辞典の紙數制限の結果最初の計畫を撤廃せざるを得なくなつた次第である。

本辞典編纂の基礎資料にはグリンチエンコ及チフチエンコの辞典を選んだ。ウクライナ語の日本語譯はワシーリ、オヂイネッ之を擔當し辞典編纂に關する諸作業即ちウクライナ語語原文の採集、ウクライナ文字に依る日本語表現前書即ちウクライナ學に關する概説ウクライナ文字に依る表現、並に校正及出版に關する諸作業はアナトーリ、ヂブローワ之を擔當した。

VII

те, що їх робота є лише маленьким внеском у велику справу ніпоно-українського культурного взаємопорозуміння.

Автори вважають необхідним відзначити щиру подяку всьому низеперелїченому високошановному панствові, дякуючи безкорисній участи яких, оцей словник виготовлений та виданий:

Ясуда Сабуро за загальне редагування; Голові Укр. Нац. Кольонії Професорові В. А. Кузьбко-Корецькому, що поклав багато зусиль у справі видання; Марківу Борису за консультацію, Масуда Сейдзоо, Ко-Сіо-Сюн, Іде Канехіса, Уеда Місао, Косіна Кендзіро, Кавано Кендзі, Йоцумото Тенузі, Оокосі Хідеко, Київченко Тетяні, Мілько-Микулич Варці Лобас Миколі, Світу Івану, докторові Лівинському Івану.

Анатоль Діброва
Василь Одинець

本辞典の編纂を終了し著者等は日本、ウクライナ両文化の接近と云ふ大事業に對比せば本努作は單なる一小事業である、と云ふことを自認しつつも高き道徳的自覺的満足感に浸されて居る。

以上の如き事情に依り著者等は本辞典が生れ出づるに當つて異常なる熱意を以て參加せられた下記諸氏に對し深甚なる謝意と衷心よりの敬意を表明する次第である。

保田三郎、クリヤブコーコレツキ、マルキヴ、ボリス、増田晴三、渡邊俊、井出包久、上田三加雄、小島貫二郎、浜野健二、四本鉄治、鈴木孝、白井桂子、大越白出子、クヴイトチエンコ、テチヤナ、ミリコーミ、クリチ、ロバスミコラ、スヴイト、イワン、リヴイヌスキ、イワン.

アナトリ・ヂブローワ
ワシーリ・オヂネツ

【出典】岡部蔵。

図 11 『ウクライナ日本語辞典』奥付

康德11年 4 月 7 日印 刷
康德11年 4 月 10 日 初版發行

定價金拾圓

ウクライナ日本語辭典

版 權
Права застережені

著者 新京特別市吉林大路四〇二ノ二
アナトーリ・クヴイトチエンコ
新京特別市寬城子南街五五
ワシーリ・オヂネツ
海拉爾市交界街房產住宅一八號
編者 青木 茂
哈爾濱市南崗區馬家街一四號
ヴイクトル・アルカヂエヴイチ
發行者 クリヤブコ・コレーツキ
哈爾濱市南崗區義州街一二三號
印刷者 原 好 一
哈爾濱市南崗區義州街一二三號
印刷所 哈爾濱印刷所
哈爾濱市南崗區義州街九號
發行所 ウクライーナ居留民會

【出典】岡部蔵。

スヴィットによれば､辞書の出版が計画されたのは 1939 年の後半であった｡この計画は、満洲国の首都新京とハルビンでほぼ同時に起こり、その主な理由は、「多くの日本人がウクライナの言語と文学に精通したかったから」であった[22]。ただこの時は、ハルビン特務機関の同意が得られなかった。

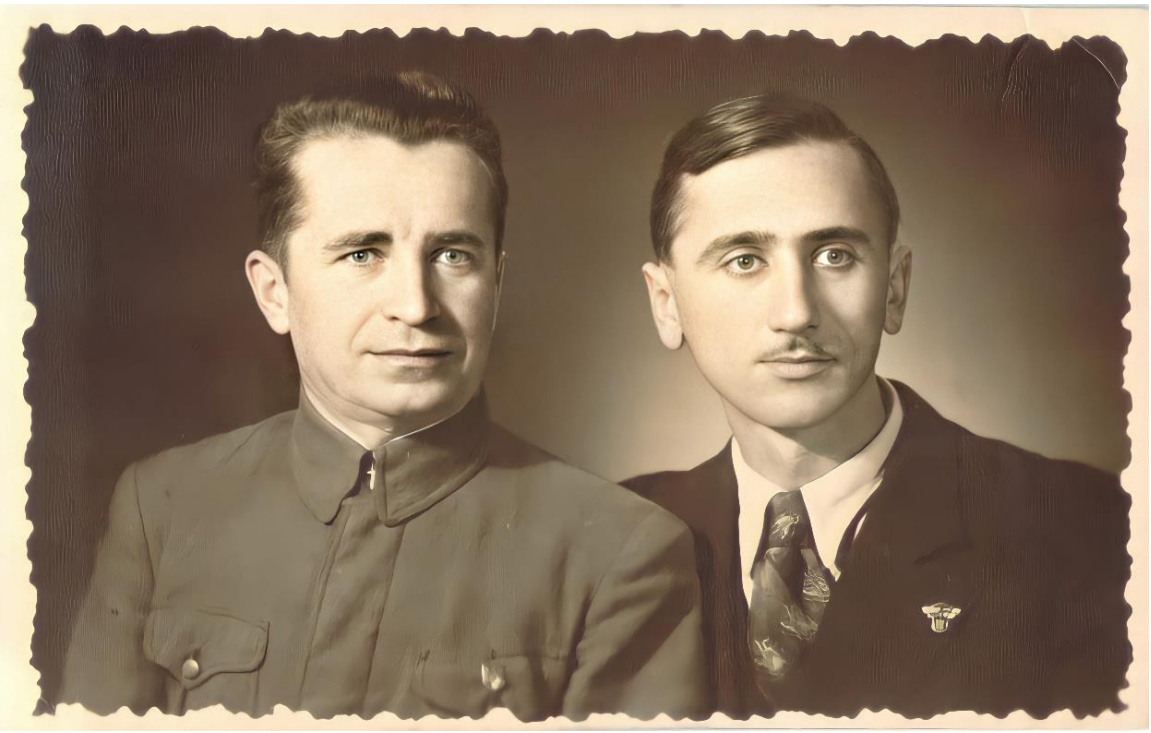
出版費用は、ハルビン特務機関や南満洲鉄道から出されたのではないかと推論されることもあるが、辞書の奥付や内容からは分からない。スヴィットによれば、その主な費用は 1939 年に死去したペトロ・ゴロビーの遺産から賄われた。ゴロビーは 1881 年にポルタヴァ生まれで 1898 年から満洲で鉄道関連の仕事を始め、1918 年以降は極東におけるさまざまなウクライナ人団体の職に選出され､1919 年から 22 年までは極東地域協同組合「チュマック」の議長を務めた。1919 年 5 月には「極東ウクライナ人の国家文化自治憲法」を採択した第 2 回ウクライナ極東地域評議会にも参加している。またアタマン・グリゴリー・セミョーノフともつながりがあり表彰もされた。1922 年 11 月 26 日にソ連当局により逮捕され、1924 年に「チタ裁判」で死刑判決を受け、減刑後に投獄された[23]。1930 年にソ連から満洲へ逃亡し、その後ハルビンで出版社と劇場を営んだ[24]。ゴロビーは裕福であったようで、その死に際しては 25000 円がウクライナ人居留民会に対して遺贈された。そこから辞書の出版費用が出されたが、辞書の発行者でもあったウクライナ人居留民会議長であったヴィクトル・クリャブコ＝コレツキーが、1944 年にその任を解任された際、ゴロビーの遺産が横領されていたことも発覚した。にもかかわらず、辞書の序文はクリャブコ＝コレツキーが執筆し、またオヂネツとヂブローワの序文では彼に対する謝辞も述べられている[25]。

出版に向けた財政的な問題も解決したため、1940～41 年の冬頃には、ウクライナ語と日本語の辞書を発行することは決定されていたようである。 編纂者としては、オヂネツとヂブローワがこの仕事を引き受けた。辞書の「序文」によれば、ウクライナ語の日本語訳をオヂネツ、ウクライナ語やロシア語の原文の採集、ウクライナ文字による日本語表現や前書き、校正、出版に関する諸作業はヂブローワが担当した。ヂブローワ、すなわちティシチェンコの義兄弟であったクペツィキーもこの頃から辞書のプロジェクトを手伝うようになった（**図 12**）。その中で、クペツィキーはヂブローワから以下のような告白を受けた。

1941 年の春、私はその辞書に関する特別会議のために彼（著者注：ヂブローワ、ティシチェンコ）のところに行った。私たちは 2 泊 3 日をともに過ごし、辞書だけでなく、ウクライナ情勢全般についても心ゆくまで話した。彼は思っていたよりも、ウクライナとウクライナ政治問題全般に精通していた。彼はボルシェビキが自分をこちら側に送ったと私に打ち明けたが、日本人にそれについて話していなかった。ただ、彼はウクライナ人のためにしか働けないと思い、ボルシェビキのために働かなかった[26]。

つまり、ヂブローワは、もともとはソ連側によって諜報目的で満洲に送り込まれたが、関係を断ち、ハルビンのウクライナ人側に立っていたのである。また、同じ頃、ヂブローワは、ダニレンコのロシア語小説『私たちが自分を犠牲にするとき』のウクライナ語への翻訳にも取り組んでいた（**図 13**）。ヂブローワはクペツィキーに相談し、「ニコライ 2 世の肖像画」を「ヘーチマン・マゼーパの肖像画」といったように、本の中のロシア的な表現を勝手にウクライナ的なものに改変した。それに対しダニレンコは「これは翻訳ではない」と同意しなかった[27]。

図 12　クヴィチェンコ（ティシチェンコ、ヂブローワ：左）とクペツィキー（右）



【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1941 年 10 月 29 日撮影）。

図 13　フョードル・ダニレンコ著『私たちが自分を犠牲にするとき』(1937 年)

【出典】岡部蔵（原本)。

ヂブローワ、オヂネツはともに流暢な日本語を話すことができ、とくにオヂネツは中国語の専門家であり、漢字が共通していることから、日本語もよく読めた。スヴィットによれば辞書の編纂作業は以下のとおりであった。ヂブローワがウクライナ語の単語を書いたのちに、日本語で音訳を書いた。オヂネツはウクライナ語の単語を日本語に翻訳した。彼らはともに、満洲国の首都のさまざまな機関で働いた経験があったため、辞書編纂に興味を示した何人かの日本人を見つけることができた。

表 1 は、同辞書にウクライナ語と日本語併記で書かれた「序文」で「本辞典が生まれ出づるに当たって異常なる熱意を以て参加せられた下記諸彦に対し深甚なる誠意と衷心よりの敬意を表する次第である」とされた人物をまとめたものである。そこには日本人協力者 10 名の名前も書かれているが、そのうち女性 2 名（鵜飼米子、臼井雅子）は日本語には名前があるが、ウクライナ語にはない。1 名なら単なるミスとも考えられるが、2 名の名前が抜けるのはいささか不自然である。本の扉の部分では、スヴィットの著作と同じように編者が保田三郎となっているが、奥付では「青木茂」となっている。同一人物であった

か、それとも別人で青木は単なる本の編集担当だったのかは分からない[28]。

スヴィットによれば、翻訳者として数人の日本人専門家が加わり、1941 年春頃から編集が始まった。編集スタッフは最大 8 人の日本人で構成されており、その中で増田晴三がリーダーであった[29]。増田晴三の名前は、『康徳 8 年満洲国官吏録』で確認でき、1940 年の時点で満洲国外務局政務処高等官試補属官であった[30]。中華系と思われる黄松俊とウクライナ語版で名前がなかった２名を除くと「序文」の日本人の名前は保田と増田を含めてちょうど 8 名であり、スヴィットのいう日本人編集スタッフと考えていいだろう。名前がなかった鵜飼と臼井はタイピストであったかもしれない。

表１　『ウクライナ・日本語辞典』編纂参加者一覧

氏名（「序文」の日本語表記通り）	付記
保田三郎	「編纂」担当。奥付では「編者」は「青木茂」
クリヤブコーコレツキ	ウクライナ人居留民会会長。ハルビンの聖ウラジーミル大学、北満学院で工学部長などを歴任。スコロパツィキー政権のウクライナ国で内務次官、郵政局長（閣僚）を歴任しながらもその後、ハルビンに来てからは親ロシア姿勢に転じ、白系露人事務局設立後は、ウクライナ系住民の同事務局への登録を促すなど全面的に協力。1940 年にはハルビン特務機関によってウクライナ民族の家代表に任命。
マルキヴ、ボリス	ウクライナ民族主義者組織のフリホリー・クペツィキーの偽名。辞書の著者ヂブローワ(ティシチェンコ、クヴィチェンコ)の義兄弟。
増田晴三	満洲国外交部勤務。1940 年時点で満洲国外務局政務処高等官試補属官。
黄松俊	「序文」のウクライナ語表記 Ко-Сіо-Сюн
井出包久	「序文」のウクライナ語表記 Їде Канехіса
上田三加雄	「序文」のウクライナ語表記 Уеда Місао
小島賢二郎	「序文」のウクライナ語表記 Косіма Кендзіро
河野賢二	「序文」のウクライナ語表記 Кавано Кендзі
四本鉄治	「序文」のウクライナ語表記 Йоццумото Тецузі

鵜飼米子	「序文」のウクライナ語版に名前がない。タイピスト？
臼井雅子	「序文」のウクライナ語版に名前がない。タイピスト？
大越日出子	「序文」のウクライナ語表記 Оокосі Хідеко
クヴィトチエンコ、テチヤナ	クペツィキーによれば、アナトリ・ヂブローワ（ティシチェンコ、クヴィチェンコ）の妻。
ミリコーミ、クリチ	日本語版の句点の打ち方が誤植。正確には「ミリコ、ミクリチ」。ミクリチ＝ミリコ・バルカ Микулич-Мілько Варка(Варвара Андріївна)は、ウクライナ青年連盟 SUM(СУМ)やウクライナ極東シーチに積極的に参加し幹部を務める。タイピング技術も習得しており、辞書編纂に参加した。夫のミクリチ・オレーシ・ステパノヴィチ Микулич Олесь Степанович とともに、ハルビンのアマチュア劇団でも活躍。
ロバスミコラ	1944 年のウクライナ人居留民会名簿によれば 1908 年生まれ。ウクライナ教会関係者。チューリン商会の会計士として働く。ウクライナ人居留民会長老ラーダメンバー。戦後は、ソ連側で働く。
スヴィト、イワン	『満洲通信』編集者。
リヴイヌスキ、イワン	東洋学者のステパン・レヴィンスキー。パリ政治学院博士、在ハルビン・ポーランド領事館通訳官、後にサイゴンのフランス総督府通訳。日宇語ともに「イワン」と記載（誤記？）。

【出典】ヂブローワ、オヂネツ「序文」『ウクライナ・日本語辞典』VII。「序文」の記載順。氏名については日本語のカタカナ表記は原文のまま。チョルノマズ『中国のウクライナ人』や各種史料を参照して作成。

辞書の最初の 35 頁あまりは東洋学者として知られ、当時ハルビンに在住していたステパン・レヴィンスキーがチェックした[31]。東洋学者であったステパン・レヴィンスキー（1897～1946 年）は、著名な建築家イヴァン・レヴィンスキーの子である。リヴィウ工科大学卒業後、1922 年にパリ政治学院で博士号を取得し、1929 年に国立東洋言語学校日本

語学科で学び、東洋学の博士号を取得した。『日本の家から』という著作でリヴィウ・イヴァンフランコ記念作家・ジャーナリスト賞を受賞した。ポーランドの政党であったウクライナ国民民主同盟 УНДО の支援を受けポーランドの外交官となり、1936 年から 1940 年にかけてハルビンのポーランド領事館で貿易経済担当官兼翻訳者を務めた。カルパト・ウクライナに対するポーランドの政策に抗議して 1939 年 1 月 19 日に辞任したが、УНДО からの圧力を受けて、辞任を撤回せざるを得なかった。1936 年には緑ウクライナのカラー地図の出版に資金を提供し、編集も行った。1937 年、レヴィンスキーの主導でウクライナ語に取り組むグループが結成され、スヴィットが編集者であった『満洲通信』とも協力した。1942 年にはサイゴンのフランス総督の翻訳官となり、1946 年にパリで病没した[32]。

レヴィンスキーが北京に移ったため、その作業はスヴィットによって引き継がれた。今度はスヴィットが上海に移ったため、残りの編集作業は日本人に引き継がれたが 1941 年秋の印刷・出版は無理と分かった。オヂネツは、編集のため、まず 5 部のコピーを作成する必要があったが、日本人タイピストを見つけるのが難しく、彼自身が日本語のテキストを準備した。秋頃には日本人タイピストが見つかり、また活字化と修正のスピードが速まった。一方、日本語の単語をウクライナ語へ活字化する作業は、ヂブローワによって３か月かけて行われ、6 万語以上が音訳された。1943 年 3 月 17 日、ヂブローワがスヴィットに送った手紙では、写真の掲載を希望していたが、叶わなかった[33]。その後、『ウクライナ・日本語辞典』は 1944 年 4 月 10 日に初版発行となったのである。

---

[1] Чорномаз. В. Українці в Китаї (перша половина XX ст.) : енциклопедичний довідник // Укл. В. А. Чорномаз. – Одеса, Видавничий дім «Гельветика», 2021.– С.51–52.

[2] Лах Р.Збірник “Далекий Схід” (1936 р.) як джерело до вивчення японського вектора сходознавчих досліджень Товариства українських орієнталістів у Харбіні // XXI Сходознавчі читання А. Кримського: тези доп. міжнар. наук. конф., 17–18 листоп. 2017 р. Ін–т сходознавства ім. А. Кримського НАН України. – Київ, 2017. – С. 26–27.

Лах Р.Товариство українських орієнталістів у Харбіні (1936): китаєзнавчі студії // Збірник матеріалів IX Міжнародної науково–практичної конференції «Україна–Китай: діалогкультур» та Міжнародної науково–практичної конференції «Сучасні тенденції сходознавства», 16–18 квітня 2019 р. / Луганський національний університет ім. Тараса Шевченка. – Старобільськ, 2019. – С. 200–210.

[3] 同辞書の構成や言語学的分析についてさらに知りたい場合は以下を参照。日野貴夫、I. P. ボンダレンコ「〈ウクライナ・日本語辞典〉の半世紀」『外国語教育 ： 理論と実践』20 号、1994 年。Хіно Такао, І. П. Бондаренко. Перший українсько–японський словник : научное издание // Всесвіт. – 2004. – N 3/4. – С. 45 – 52.　Малахова Ю. Структура словникових статей першого українсько–японського словника Анатолія Діброви та Василя Одинця // Вісн. Київ. нац. ун–ту імені Тараса Шевченка (Східні мови та літератури). – К. : ВПЦ "Київський університет", 2014. – Вип. 1(20). – С. 25–28.

[4] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 70–71.

[5] ウクライナ東洋学者協会編『遠東雑誌』ウクライナ人居留民会、1936 年、1 頁。

[6] Капранов С. Діяльність. Товариства українських орієнталістів у Харбіні(1936–1937 рр.) //

Східний світ. Київ, 2011, № 3.– С. 76.
[7] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 74–75.
[8] ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』成文社、2010 年、95 頁。
[9] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 55–56.
[10] Там само. С. 183–184.
[11] Там само. С. 37–38.
[12] 岡部芳彦『日本・ウクライナ交流史 1915–1937 年』神戸学院大学出版会、2021 年、57 頁。
[13] 1909 年スタニスラウ（現イヴァノフランキフシク州）生まれで極東の OUN の活動家。コノヴァレツィによって満洲に送られ、1936 年 6 月にベルリンからハルビンに到着した。英国市民権を持っていた。1937 年から 39 年にかけてウクライナ人居留民会の要職を歴任した。 1937 年からは極東シーチでの軍事訓練も行った。シーチの機関紙『極東ナショナリスト』の共同編集者でもあった。その後、シーチ内の路線対立から 1940 年代初頭には上海に移った。そこでもウクライナ人社会で活動を続け、1941 年 7 月に発行が始まった英字紙新聞「The Call of the Ukraine」の創刊号に記事を書いた。1952 年 5 月 4 日に逮捕され、ソ連に強制送還され同年 6 月 20 日、彼はスパイ活動と「ハルビンの反ソビエト組織ウクライナ極東シーチ」の創設の罪でモスクワ軍管区軍事法廷から死刑判決を受け同年 8 月 26 日にモスクワで銃殺された。2001 年 3 月 14 日に、ロシア連邦検察庁によって名誉回復された。Чорномаз. В. Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 106–107.
[14] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 108.
[15] ウクライナ人居留民会『遠東雑誌』4〜5 頁。
[16] ウクライナ人居留民会『遠東雑誌』9〜17 頁。
[17] 教授、化学者。チェコスロバキアで教鞭を執り、ハルビンに移ったあとはチューリン商会の研究所で化学研究を継続。ウクライナ人居留民会やプロスヴィータ協会でも積極的に活動を行った。Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 505–506.
[18] 物理の教員、ハルビンのプロスヴィータ協会の創設者の一人。Там само. С. 102–103.
[19] 岡部『日本・ウクライナ交流史 1915–1937 年』119 頁。
[20] 生田美智子「ハルビンにおける二つのロシア」生田美智子編『満洲の中のロシア：境界の流動性と人的ネットワーク』成文社、2012 年、59 頁。
[21] 建国大学編『康徳 8 年度建国大学要覧』建国大学、1941 年、51 頁。『康徳 9 年度建国大学要覧』1942 年、55 頁。
[22] Світ І. Українсько–японські взаємини 1903–1945…– С. 295.
[23] 1923 年から 1924 年かけて、ソ連当局によって、極東ウクライナ共和国の約 20 人の指導者が逮捕され、裁判にかけられた。チタ裁判についてはスヴィットの以下の著作が詳しい。Світ І. Суд над українцями в Чіті (1923–1924 роки) // Лондон, 1964. –38 с.
[24] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 64–65.
[25] Там само. С. 113–114, 411.
[26] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 266.
[27] クペツィキーは、1939 年にダニレンコを訪ねており、ハルビン特務機関との関係を質問し喧嘩別れした。ダニレンコはウクライナ民族の家やウクライナ人居留民会の幹部であったので、クペツィキーのその後の活動に負の影響を与えたという。クペツィキーはダニレンコを「小ロシア人」と称している。Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 266–267.
[28] なお、奥付のもう一名の日本人で「印刷者」となっている原好一は、ロシア語書籍を取り扱っていたハルビン書房の経営者であったようである。「成瀬孫仁日記（五）昭和十六年十二月」『実録・個人の昭和史 I（戦前・戦中・戦後直後）』メロウ伝承館（URL: https://www2.mellow–club.org/densho/modules/d3forum/index.php?post_id=3629 最終閲覧日：2021 年 5 月 2 日）。
[29] スヴィットは著書で「スマダ・セイゾウ」と書いているが「増田晴三」の誤りである。

[30] 国務院総務庁人事処 編纂『満洲国官吏録：康徳 7 年 4 月 1 日現在』国務院総務庁人事処、1940 年、22 頁。
[31] Світ І. Українсько–японські взаємини 1903–1945…– С. 296.
[32] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина ХХ ст.) …– С. 117–118.
[33] Світ І. Українсько–японські взаємини 1903–1945…– С. 296 – 297.